

## 葉山嘉樹の魅力

### 要 旨

葉山嘉樹は一九四五年、敗戦の年、旧満州国開拓団から引き上げる途中客死した。没後五〇年を記念して、葉山晩年の生活ゆかりの人々などが刊行委員会を組織し、『葉山嘉樹短編小説選集』を刊行し、また「文化講演会」を開催した。本稿はこの講演内容をもとにしている。

プロレタリア文学作家として華々しくデビューした葉山だったが、厳しい弾圧と、戦時下の諸状況の中で、思想的には後退を強いられる。が、最後まで底辺民衆の一人として、その解放と救済を願い続けたことは確かである。

そのような葉山の作品の魅力について、

- 一、子供の描写、子供への眼差し
  - 二、人間への眼差し
  - 三、自然描写、自然観
  - 四、文体
  - 五、視座、発想、方法
- 等の観点から、作品の具体に即し、その魅力について概説した。

### 一 はじめに

今日、この会場に来る前に、落合ダム湖畔見晴公園にある、「葉山嘉樹文学碑」前での碑前祭に参加しました。葉山はお酒が好きだったにもかかわらず、苛酷な戦時下の窮乏の中で、ろくなお酒、というよりほとんどアルコールそのものが手に入らなかった世相の中で死んでいきました。参加された皆さんとともに、文学碑に、地元の銘酒「恵那山」を献げました。

私がこの文学碑を初めて見ましたのは、ずっと若い頃、三〇年ばかり前のことです。大学の三年生の一二月から葉山文学に取り組み始め、五年目頃だったでしょうか。すでに私にとって葉山嘉樹という作家は身近な存在となっておりましたが、葉山は当時、一般読書界から忘れられ、葉山の作品を手に入れることがほとんどできない状況でした。いわゆる文学全集物もあまりなく、一、二の文学全集に入っている作品は『海に生くる人々』と「セメント樽の中の手紙」「淫売婦」程度で、それ以外の作品を手にすることは至難のことでした。

そのように葉山文学が冷遇されていた時期に、非常に失礼な表現ですが、この草深い木曾の一郭山口村に、葉山没後一四年にすぎない一九五九（S34）年という随分と早い時期に、葉山嘉樹の文学碑が建て

浅田 隆

られたことについて、なにか不思議な思いを抱きました。

現在では葉山の出身地である福岡県京都郡豊津町の八景山、長野県駒ヶ根市の切石公園にも立派な文学碑ができており、さらには、まだ見ておりませんが、名作『海に生くる人々』に描かれている北海道室蘭市の大黒島にも文学碑ができ、プロレタリア文学作家としては珍しく、四か所にも文学碑が建てておりますが、それらはすべてこの山口村よりずっと後のことです。五九年といえ、日本はまだまだ貧しく、いわゆる高度経済成長期以前のことであり、村起こしの観光資源という発想とは無縁のものであったはずで。

建碑後も、建碑何周年記念という形で記念行事を催され、またこの度は地元有志により『葉山嘉樹短編小説選集』刊行委員会が結成され、葉山嘉樹生誕百年、没後五〇年記念として、立派な作品集を世に送られました。私も編集に関わらせていただきましたが、いかに葉山嘉樹の最晩年の地であるとはいえず、『葉山嘉樹短編小説選集』刊行に対する皆さんの強い情熱に触れ、何が地元の人々をして葉山に関わらせているのかが少々不思議でありました。

ところが、つい先日、刊行委員会のメンバーでもある加藤庄一先生が、歴教協宮城大会で発表された「馬鹿にはされるが真実を―葉山嘉樹と中津川―」を拝読し、それらの疑問は水解いたしました。

以前この地域にあった忠魂碑が、戦時下に供出されてなくなっていたのを、その時期に復元しようという動きが生じ、これに対抗する形で、この地域の革新の源流としての葉山の、文学碑を建てようとの運動が盛り上がったことであつたとか。戦前の言論・思想への厳しい弾圧下に、葉山と触れ合ったりされた人々の思いが結集したとのことでありました。

葉山という人は実生活面ではやや破滅的傾向を持っておりましたが、一九二一（T10）年の名古屋セメント会社の頃以来、実際活動でも文

学活動でも、常に民衆を愛しつづけた人で、一九三五（S10）年前後における転向後も、その傾向を持ち続けておりました。

作家というものは作品が読まれることで生き続け得るのであり、また、プロレタリア文学ということ言えば、民衆の読者を獲得しつづけることこそ生命であります。そういう点から考えて、民衆の手で『葉山嘉樹短編小説選集』が刊行されたということは、葉山は作家冥利につきるということになります。

今日は文庫本全盛時代で、本屋さんには様々な会社の文庫本が並んでおります。しかしよく見ると、商業ベースにのって一時的に売れる作品が圧倒的で、華々しくは売れないが長い時間の中で徐々に売れていくというような作品はあまり配架されておられません。ましてプロレタリア文学などは、各社の文庫にある程度入っているとはいえず、総量からすれば微々たるものであり、また店頭で配架されているのは僅少です。このような現状を考えますと、プロレタリア文学は読まれなくなつたのではなく、作品が資本の論理によって、読者大衆から隔離されているといえます。そういう意味でも、この度の『葉山嘉樹短編小説選集』の刊行は、読者大衆が自身の手で作品を取り戻す行為であつたと考えております。

## 二 葉山文学と読者

さて、葉山嘉樹はプロレタリア文学の作家であります。戦前のプロレタリア文学運動は大きく言って二つの流れに別れておりました。

一つは小林多喜二などに代表される共産党系の運動であり、葉山などは共産党系からは理論的にだらしなしいとして批判される側にありました。元来葉山は自由奔放な人ですので、理論的に枠組みされた中できつちりと発言するというようなことができない人であり、それがま

た逆に感性の輝きを奔放に歌い上げていくという作品の魅力を形成しております。しかしまた、理論的に整序されていない面や転向したというところで、戦前は葉山文学は駄目だという評価を受けることにもなりました。

戦争が激しくなり、軍部の専横によって戦線が拡大していくにしたがい、思想・言論の弾圧は苛烈をきわめるようになり、プロレタリア文学などとは言っておれなくなります。そして心ある人々によって反戦的作品が書かれるようにもなります。そのような戦時下状況においても、反戦という立場に居て、やはり理論にとられない形で、葉山なりの作品を書いていきます。そしてこれらの作品は、転向後も含めて、民衆の文学であり、虐げられている人々の感性や生活苦を訴えた文学になっております。

戦後になって、このような葉山文学をいち早く評価しなおされたのが、文学碑建碑二〇周年記念集会（79年）で講演された小田切秀雄先生でした。しかし、研究者が研究界でいくら評価してみても、作品そのものが読めない状況が続いているかぎり、作家は決して幸せではありません。葉山と読者との関係の改善に大きく貢献されたのが、浦西和彦先生でした。謎の多い作家と言われ、様々に誤解されていた葉山の生涯を、緻密な年譜作成によって明らかにされ、その過程で発掘された諸作品を全六巻の『葉山嘉樹全集』（75〜76 筑摩書房）として編集されました。この全集の出現によって、戦前戦後を通して、はじめて葉山文学の全貌を私達に手にすることができるようになりました。しかしこの全集も刊行後二〇年となり、今日では古書店でもなかなか入手困難であり、ときたま古書市場に出ても、わずかに六巻の全集が一〇万円を超えるような状況にあります。そのような意味でも、『葉山嘉樹短編小説選集』の刊行は意義深いといえます。

今日は時間が許すかぎり、そのような葉山文学の魅力を、やや分析

的にお話したいと思っております。

この講演の依頼がありましたとおり、校務が輻輳しておりましたので、「葉山嘉樹の魅力」ということなら、比較的簡単にお話できるかもしれないと思ってこの題目でお願いしました。日頃葉山の魅力に惹かれて研究しておりますので、この題目なら、縦横にお話できるかなと思っただけです。しかしながら、実際に準備にかかりますと、「魅力」を語るということとはとてつもなく大変なことであるのに気付きました。というのは、魅力とはきわめて直観的で主観性が強く、私が主観的に享受している葉山の魅力を、お聞きいただく皆さんに納得していただくためには、私の主観を一度客観的な表現に組み替えなければなりません。単に作品の一部分を読み上げて「いいですねえ、いいですねえ」と言ってみても、なぜ、どのような意味でということが伝わりません。また主観的なことばを客観化する過程で、私のことばが私の心を裏切っていくようなこともあるかも知れません。が、今日は時間が許すかぎり、そのような葉山の文学の魅力について、

- 1 子供の描写、子供への眼差し
  - 2 人間への眼差し
  - 3 自然描写、自然観
  - 4 文体
  - 5 視座、発想、方法
- といった観点から、お話したいと思っております。

### 三 子供の描写、子供への眼差し

葉山文学には沢山の子供が描かれています。そして葉山は優しい眼差しを注いでおりますし、また、描かれている子供たちは概念としての「子供」という姿においてではなく、生き生きと、可愛く個性的に

作中に存在しております。

まず『誰が殺したか? 序』(27・1 日本評論社)ですが、「序詩」  
とも呼ぶべきもので、長いものです。一節を少し読んでみましょう。

嘉和、  
民雄、  
二人のわが子よ!

父は、監獄の中で、おん身たちのことを、胸を焼かれるように  
思った、そして此文章を書いた。

監獄から出て見ると、おん身等は、きわ子と共に行衛が分らな  
かった。

そして、今、御身等は、餓死してしまったことを聞いた。

私が、御身等が大きくなった時、幼い時の、社会組織はどんな  
だったか、その組織内に於ける、プロレタリアである父を持った、  
御身らの生活はどうであったか。を、知らせるために書いた、此  
文章はどうだ。

御身等は、今の組織の下で、社会主義者を父に持ったために、  
餓死することを「体験」してしまった。(中略)

おまえたちは、淋しく、然し、飢えのために、腕き死にに死ん  
だらうね。

あんなに可愛い、お前たちだったのに。

私は胸を掻きむしられるようだ。

おまえたちは、私たち両親を呪ってくれ!

私も、此父も、自分自身を呪う!

そして、こう云う風な、出来事を捲き起した、直接の人たちと、  
その人たちをそんな状態に追いやったものを呪う!

誰が、お前たちを殺したのだ!

おまえたちの墓は、労働者の血で汚された此地上には建て、は

ならない。

この「序詩」によれば、労働運動によって投獄された獄中で、子供  
たちに向けてこの作品を書いている、しかし監獄を出てみると妻子は  
行方不明となっており、やがて子供たちが餓死したことを知った、と  
あります。

葉山は実際に、一九二二年から二五(T11)14)年にかけて、未決・  
既決あわせて四回投獄されていますが、最後の投獄から出獄すると、  
嘉和・民雄の二児とともに妻喜和子が行方知れずになっていました。  
葉山はこの衝撃からか、労働運動の戦線から離脱して、中津川市のす  
ぐ北側、落合の木曾川にかかるダム工事現場に入り、ここで、二児が  
死去したことを知ります。

獄中で執筆した草稿の段階(24年)では、二児が成長したのちに読  
んでくれることを想定して書いておりますが、発表段階(27年)はそ  
の子供たちが死去した後であり、そのことによって後に書き換えられ  
た結果でしょうか、文体は耽情的になっております。この時葉山は三  
七歳でした。分別ざかりの中年です。しかし、この「序詩」には耽情  
的で、子供を失った悲しみや悔しさが、何のためらいや銜いもなく心  
の底から噴出していきます。もしこのような率直な表現ではなく、真情  
を吐露することへのためらいや銜いが文体のなかに混じっていれば、  
おそらくこの序詩はキザなものになってしまったに違いありません。

ここに葉山文学の文体や内容的な魅力があるように思います。

葉山への批判として、実生活面での経済的な計画性がなく生活防衛  
の努力を怠りながら、困窮の責任をすべて社会制度の問題に転嫁しよ  
うとしているという指摘もあります。しかしながら、それが仮に幾分  
かは当たっていたとしても、作品が持つ力とは関係ありません。

次も『誰が殺したか?』の一節です。

これは主人公が勤務するセメント会社で村井という工員が大火傷をし、その家族の救済のために主人公が尽力しようとしている場面です。

俺は何も考える必要はないのだ。俺は俺の唯一の宝の、あの可愛い子供さえ育て上げればいいのだ。誰だってお前の不幸を救うものにはありやしないか。だから俺だって人の不幸なんぞに気をとられたり、『世の中の仕組みが間違っている』なんて途方もない大きい処に目をつける事など要らないんだ。そんな事に気をとられると、今までと同様に自分自身さえ救えなくなるんだ。子供まで殺しちゃう事になるんだ

ここには子供への無条件な愛情とともに、その一方で社会正義の道を歩みたいという願望を内部に持ちながら、その志向性は、当代においては相容れないものであったため、引き裂かれた心を持つジレンマが描かれています。そしてまた、このジレンマを率直に表白してあります。当時あっては、運動者たちは生活や生命を掛けて活動しておりました。この作品が書かれた時期、葉山はプロレタリア文学作家として囁目されており、普通であれば、心のうちにためらいを持ちながら運動しているなどということはなかなか言えない立場です。にもかかわらず葉山は、子供たちへの愛のために生活防衛を優先させたいという、切なく苦しい思いが、主人公内部にあるということを描きます。

社会正義に向かって私的な問題の一切をなげうつ主人公というのも勇敢で、読む者の心を揺り動かすことでしょうが、家族というしがらみを抱えている労働者には、おいそれと動けなかつたはずであり、引き裂かれているその苦しさを描くことで、当代の制度全体が、そしてその制度のなかに置かれている労働者の現実が、理論的な解説ぬきで読者に伝わってくるように思えます。

内容的には葉山自身の実体験に裏打ちされたものであるとはいえず、ここに子供への父親としての苦悩を置くことで、読者の心を深くえぐっ

てくるのではないのでしょうか。

私は、橋の手すりを離れて電車の終点に立った。電車は一時間で、私を嘉坊の家まで運んで呉れた。

父は、汗だらけ埃まみれの安背広を脱ぎ捨てると、全で何かを奪いかえすような勢いで嘉坊を抱いた。

「若し俺が村井であつたらどうだろう」

父は嘉坊を出来る丈け多く。深く、長く、鉛玉のように愛さなければならぬ。

この「若し俺が村井であつたらどうだろう」という思いは、ひとり主人公に限定されるものではなく、多くの労働者が共有している現実でもあるわけで、そのゆえに深い共感を呼びます。

主人公はこのあと、村井の火傷による死亡事件をきっかけに、会社内で組合を作ろうとします。それは今日のような労働関係の認識に立って労働者の権利を確保しようというようなものではなく、労働者の相互扶助的な組織でしかありませんでした。が、その程度の組合でも、会社側に発覚して会社を誠になつてしまいます。そして、愛する子供たちを再び窮乏のどん底に落とし込むこととなります。

次も「誰が殺したか？」の一節です。

その頃は、もうお前も大きくなって、百日目には素っ裸になつて写真を撮った。その可愛い写真はずっと後になって、お前は自分で見分けて、「これ坊や。これ、坊やだよ」と喜んで見るようになった。そして、もうその頃から、まるで天使のように無邪気に笑う事を知った。

お前が一つ笑うと、その笑いにつれて、家中が笑った。

ここには幼い成長期の子供の姿が彷彿と描かれており、その子供が今では餓死してしまっているという「序詩」のメッセージによって、読む者の心を締め付けます。

また、表現として「もうその頃から、まるで天使のように無邪気に笑う事を知った」という描写は月並みで、「天使のように」という表現は工夫も何もない常套表現にすぎないのですが、そのような表現をためらいなく使ってしまうあたりには、素人性が感じられ、前後の文脈のなかに置かれることで、無垢な姿が引き立っているように思えます。そして無条件に、子供を見つめる親の姿と、無邪気な子供の姿がともに浮かび上がってくるのではないでしょうか。

次に『移動する村落』(97・9・12〜98・2・9)『東京朝日新聞』を見てみましょう。

虎さんは、海と川との区別について、花ちゃんに納得の行くまで説明することが、どうしても出来なかった。

「何故、川は幅が狭くて長いが、海は幅だけで長さがちっとも無いのか？」などと花ちゃんに聞かれても、虎さんは反問する以外の法を知らなかった。

「どうして海には、幅だけで長さが無いってんだい」

「だってそうじゃないか、横許り広くってさが無いじゃないか。あの帆懸け舟の帆の一寸上までつきゃ無いじゃないか」

「花、お前は何だって海の長さ許り(はか)気にして、おっ母あ(お母)の事を気にしないんだい。おっ母あ(お母)の事を何とも思わねえかい」

「おっ母あは分ってるさ。飲んだくれじゃねえか。女のごろつきだって、ちゃんだっついてるじゃ無いか。だからよ、何だって海は幅丈けなんだよう」(中略)といった調子であった。

この作品には虎さんという工事人夫と花ちゃんという親子が登場します。この花ちゃんも実に天真爛漫な子供として描かれています。

右の部分は、虎さんが花ちゃんを伴い、汽車に乗って天竜川沿いの工事現場に向かっている場面です。今年七歳の花ちゃんは長い旅をす

るのは初めてのことで、車窓から目に映るすべてが珍しくて仕方ありません。花ちゃんは幼い心に生じる疑問を次々に虎さんに発します。どなたにも経験がおありのことと思いますが、子供というものは大人が当然として見過ごしている事柄について、「なぜ、なぜ？」と奇抜な問い掛けを矢継ぎ早にいたします。答えられないことや、答えることが面倒なことがよくあります。この辺りを描いているとき葉山は、脳裏に映る花ちゃんの姿を、目を細めて見つめているのではないかとさえ感じます。

しかしこのようにあどけない花ちゃんではありませんが、

花ちゃんは母と別れて、父について木曾の山の中の工事場へ行くのを、少しも悲しがりはしなかった。言葉つきも、花ちゃんは男の子と変わらなかった。

とありますように、花ちゃんの母親は男まさりで子育てには関心がなく、男親である虎さんになついているという、母の愛を知らない七歳の女の子として描かれています。

まっしぐらに食っていた。何とまあ、どういう積りでだか、お菜だけを残らず食べ尽した。それから次は、飯だけにかゝった。

「何だって、菜と飯とを交る／＼食わないんだい」

と、虎さんが四合瓶を口から離しながら訊いた。

「もったいないからさ」

と、花ちゃんは答えた。

「どうしてもったいないんだい。変な女っ子だなあ」

「だってそうじゃ無いか。両方ごっちゃに食ったんじゃ、味が分らなくなってしまうじゃ無いか」(中略)

味覚にふけり得る時はいゝ。だが、そうで無い時が間近に来ないとはいえない。今までに幾度も経験したように。

「もっと欲しいかい。欲しかったら、ちゃんの飯も食っていゝん

だよ」

「もういゝよ。ちゃんだって腹が減ってるんだらう。酒の後じゃ飯を食わないと毒だよ」

親が子供にいつて聞かすような口調で、七つの花ちゃんはいった。

のように、花ちゃんはわずか七歳でありながら、大好きな父親の健康を気遣います。弁当の食べ方の奇抜さは子供としての無邪気さそのものといえましようが、もっと食べたいであろうご馳走を、父の健康を気遣って自制するなど、けなげにすぎます。

しかし、読者はこのような生き生きとした子供の姿を、楽しく微笑ましく読んでばかりはいられません。先に見た『誰が殺したか?』でも明らかのように、当代の労働者たちの背後には、常に生命的危機が忍び寄っているのです。例えば工事現場に入って、虎さんが地滑りや落盤その他の事故に見舞われでもすれば、庇護者を失った花ちゃんはたちどころに、孤児とならざるをえません。後に紹介する「山抜け」(26・7『淫売婦』所収 春陽堂)のとし子の境遇が、今の幸せな花ちゃんの背後に待ち受けております。

このように、天真爛漫で無邪気な子供たちを生き生きと描いてみせることによって、逆に、これらの子供たちの置かれている境遇の苛烈さが、理屈ばった堅苦しい言葉による解説がまったくなくにもかかわらず、作品の背後から読者の脳裏に浮かび上がってまいります。これらの子供たちを、一つまちがえばそのような悲惨な境遇に落としこむ社会制度の現状が、そしてまた、親としての苦しさ、生々しく押し寄せてまいります。

「農村通信」(37・4・25)27『東京朝日新聞』にも、子供の奇抜さを感じさせる表現があります。

伊那谿谷では遠望の利く点で、優位にいるのだが、子供はこの

いい景色を、背中を私に搔かせる場合に応用する。

「お父ちゃん、背中が痒い。搔いて」

と今年学校に上る女の児が云うのである。そこで、私は首から手を入れて背中を搔いてやる。

「もっと天竜川の方、いや、もっと天竜川の方、あ、今度は駒ヶ岳の方、ええ、そう」

こんな調子である。

大人になるということは社会の常識にからめとられ縛りあげられる過程であり、その点、とらわれない子供の感性や発想は生き生きとしていて楽しいものです。そして、ここで注意しておきたいのは、葉山という作家が、常識の世界に住む大人でありながら、子供たちの姿を生き生きと作品のなかにすくいあげてきているということです。そこに葉山の感性の柔軟さがあるといえます。

次に先程少し触れました「山抜け」を見てみましょう。この作品は山の地滑り(山抜け)によって家が押しつぶされ、幼い女の子一人だけがとり残されるという内容ですが、葉山がプロレタリア文学作家として華々しくデビューした頃の作品ですので、後年の天竜川沿いの工事現場とは無関係で、名古屋時代の労働運動によって投獄されたあと、木曾須原の堰堤工事や落合発電所工事などに従事したなかで得た素材ではないかと思われます。したがって中津川近辺の、木曾川に雪崩落ちる急峻な斜面に、貼りつくようにして散在する集落の物語でもあります。

とし子は山の農家の、父母と姉の五人家族の少し歳の離れた末っ子で、いつもの朝のように小学校へ行きますが、その間に地滑りがあり、とし子の家だけが押し流されます。報せを受けた学校では、その方面に帰る子供たちに引率教員をつけます。

彼等の一行が、とし子の家の見える、小さな峠の上まで来た時  
子供たちは叫声を上げた。

かれらは、そこにとし子の家を見なかった。今朝までその峠の  
すぐ下に在ったとし子の家は、もう無かった。その低いちよつと  
した、かまぼこのような平地の代りに、岩や、大木などの、広い  
かまぼこが現出していた。

「ヤー」と、一人の男の子が叫んだ。

「ヤー」と、一人の女の子が叫んだ。

「とし子の家はありやしないじゃないか」と、一人が叫んだ。  
子供の眼に映った情景描写の直後に描かれる「ヤー」という子供の叫  
び。子供たちには理解を超えた自然の力に直面して、「ヤー」という  
驚きと悲鳴との凝縮された声以外に出ないのです。様々に子供たちの  
姿を表現したとしても、子供たちがその情景に直面した瞬間、とっさ  
に感じているであろう驚き、恐怖、不可思議といった雰囲気は伝わら  
ないでしょう。

子供たちは、平素ならば、ふざけて、岩の上や、木の陰など、  
跳びまわる蚤のようにはしゃぐのだったが、今は、しっかり、先  
生のどこかへ掴まっていた。

何かしら、重いものが子供たちの上へ、のしかゝったのであつ  
た。

先生は、小鳥たちの止り木のように、打ち込まれた杭のように、  
そこへ立っていた。

とっさの驚きが過ぎ、子供たちは不安に襲われます。短い表現では  
ありますが、茫然と佇立してなすすべもない先生、にもかかわらずそ  
の先生を頼りに、すがるように取り巻く子供たち。自然の力の前に投  
げ出されている人間の姿が、くっきりと表現されており、

その後のとし子はどうなったでしょうか。

こうして、とし子は孤児になった。彼女は、村中で、「飼われ  
る」ことになった。

彼女は、もう学校へ通うのを止めた。そして、子供を背に負っ  
て、曾つて自分の住んでいた家の跡の、石地蔵の前へ行って、守  
をしていた。

彼女、「山の娘」として、十三の年まで村に育った。

十三の歳の、盆祭りから、彼女の姿が村から消えた。

とし子が、N町の、暗い、汚い、料理屋に私を私は知っ  
ている。

貧しい山村の農民には、とし子をか弱いそうに思っても引き取つて  
育てるだけの余裕がありません。村で「飼われる」幼い娘が、かつて  
貧しいなりに家族と楽しく暮らした場所で子守をしているという部分  
は、読者の胸を締め付けます。一三歳で村から姿を消したとし子は今、  
「暗い、汚い、料理屋に私を私は知っている」と、叩きつける  
ような一言で作品はおわります。おそらくこの汚い料理屋とは曖昧屋  
と呼ばれる売春宿に違いありません。

こうして見てきたとき、『移動する村落』の花ちゃんも、虎さんに  
事故があったときにはこのとし子と同じ運命をたどることになる可能  
性があり、『淫売婦』(25・11『文芸戦線』)の女性や『セメント樽の  
中の手紙』(26・1『文芸戦線』)の女工もまた、花ちゃんやとし子の  
成人した姿と言えなくありません。

「子供の描写・子供への眼差し」についての最後に、『海に生くる  
人々』(26・10 改造社)の一節を紹介しましょう。

『海に生くる人々』は室蘭と横浜の間を石炭を満載して運ぶ船の物  
語です。作中では、海上労働者たちは陸上で食いつめ海に流れてきて  
いる群像として描かれており、もっとも苛酷な搾取と、自然の脅威の

前に投げ出されています。季節は冬。厳寒の荒れ狂う北の海、日常的な生命の危機。船乗りたちは動かない大地の上で生活することへの憧れを抱き、殊に、家庭の暖かさ、ぬくもりに憧れます。そのような憧れを描いた部分です。

荒れに荒れる海上に、灯台の光を眺むるほど、人の心を感傷的にするものはない。此の海の上は、今にも我々の命を奪おうとする程暴れ、喚いている。そして、我々の家は宙天から地底へまで揺れ転ぶ。そこには火もなく、灯さえもない。だのに、あそこには灯台が光る。その灯台は、確りと地上に立っている。そこには家族がある。団欒がある。愛すべき子供がある。いとしい妻がある。(中略)「もうねんねするんです。ね、夜食べると、ポン／＼いた／＼ですよ。サ、ねんね」と、母は今年三つになった子供を膝の上に抱き上げるだろう。そうして、可愛くて堪らぬと云った風に、子供の頬にキッスするだろう。そうして、夫と顔を見合わせて微笑むだろう。

ここにもまた、読んでいるこちらが照れてしまいそうになる表現があります。実際の家庭の描写ではなく、水夫が想像するわけです。荒くれた男たちの心のうちに、邪念のない、純真無垢な愛や暖かみへの渴望があることを描きます。

今まで見てきた子供たち、あるいは子供への眼差しを整理すると、共通して言えることは、家庭への愛、愛のある人間関係、およびそれへの渴望、そしてそれらを失う悲しみなどが、子供を介して描かれているということではないでしょうか。

葉山嘉樹は二三歳(6年)で母と生き別れ、以後は厳格な父と二人暮らしになります。その故か、女性の優しさや暖かさ、家庭のぬくもりを求め続ける傾向がありました。最初にご紹介しました『誰が殺したか?』にあふれる悲痛な叫びも、『移動する村落』に描かれた花ちゃ

んへの眼差しも、そのような葉山の内面とかかわっているように思われます。

#### 四 人間への眼差し

子供の描写を見てまいりましたが、次に「人間への眼差し」という視点から考えてみたいと思います。

先程『海に生くる人々』の一節を紹介しましたが、『海に生くる人々』は長編で、作品のテーマは海上労働者の闘争です。水夫たちがなぜ闘わねばならないかについて、きわめて具体的に、劣悪な環境と待遇・労働条件などとともに、恣意的な高級海員の人身支配が描かれます。そして粗野な荒くれ男たちと見なされがちな彼らの内面をも、葉山は愛に満ちた眼差しで描きあげており、そのことが、この作品に大きな説得力を与えているとも言えます。

優しい女性! それは、彼等には、何よりも貴い宝玉であった。一切の歴史から虐げられて来た、哀れな弱い、女性! 彼等が反抗する必要のない、彼等によってまでも愛護されなければならぬ、虐げられたる女性、それは、虐げられ苛まれて来た労働階級と、よく似た運命を持っていた。

彼等は女性を慕った。そして、それが娼婦と淫売婦とに限られ

てあった。と説明しています。海上労働者たちは陸での生活に憧れるとともに、荒っぽい男たちの世界であるため、女性に憧れます。しかし、彼等貧しく、うす汚れた下級水夫たちを相手にしてくれる女性は滅多にないというのです。

登場人物の一人三上は仲間たちから異常性欲者と呼ばれる、粗野で無教養な人物でした。同じ水夫仲間の西沢が女に愛された、この女と

いのは港で船乗りを相手にしている暖味屋の売春婦ですが、女に愛されたということを耳にすると、必ず次の航海でその女を目当てに出掛けます。そのような三上を葉山は次のように描きます。

三上は、若し、ほんとうに三上を愛する女があったら、彼はその女のためにどんなことでも虚心平気にやつてのけたに違いない。彼は、生まれてから、直ぐにその生の母親に死に分かれて、それ切り、人間に愛があると云うことはおろか、子供に乳があると云うことも知らずに育つたのであった。彼は極めて幼い時から、海辺へ出て、漁夫の手伝をした。そして自分の食う分は五つ位の時分から自分で稼いだ。(中略)彼は、誰からも、ほんとに愛されたことのない人間であった。又誰もほんとに心から三上を愛する気にはなれないだろうと思えるほど、彼は異常にひねくれていた。そのくせ、彼は、「誰かゞほんとに俺に親切にして呉れたら」と、どんな時間にも思わぬことはないのであった。従つて、西沢が女郎に愛されたと云う話を聞くと、屹度、彼はその女の名前を訊き出して、次航海には、ソーツと一人で、「愛」とはどんなものかを探りに行くのであった。三上の此の心の秘密は、誰も知らなかった。であるから、彼は変態性欲者と、その真実の「愛」を求めめる原始的巡礼の状態を名づけられたのであった。

いわば三上の姿は、先の「山抜け」のとし子の男性版だと言えます。当時にあつては底辺労働者は常に生命的危機にさらされており、結果として、一家の働き手を失えば離散せざるを得ません。家族のぬくもりも知らないままに、命をつなぐために幼時から世知辛い世間にもまればつづけ、生きるための生命力は養い得ても、人間関係のなかでの愛情表現を受けたことのない三上は、愛の表現方法を持たず、ただ動物的な性欲に突き進まざるをえないのです。いくら誇張された表現ではあるにしても、人間としての最低限の尊厳さえ保障され

ていない生活が強いられている現実があるということが、理屈抜きに伝わってまいります。

作品の随所で葉山は触れておりますが、ここで注意すべきは、世間的にはどうしようもない「ゴロツキ」と見られている人間の内部に対して、人間的な暖かい眼差しを注いでいるということです。

次に「濁流」(36・7「中央公論」)です。舞台は天竜峡谷の泰阜村です。葉山は三四(S9)年、東京での作家生活を切り上げ、家族を伴って鉄道工事現場に入りました。当時この天竜峡谷では三信鉄道の工事と大同電力のダム工事とが重なって、三千人に余る工事関係者とその家族が住み、狭い谿谷には飯場がひしめいておりました。

物語は人力による自然への挑戦とも言える難工事と、人間が多くの犠牲者を出して築き上げようとしているものを自然の力が支配し返してくるといふ、自然と人間の闘いが基調になっております。この工事人のなかに江部という優秀な隧道掘削職人がおり、職人気質旺盛な江部をめぐるペーソスが挿入されております。

難工事の現場を掘削し終えた江部にとって、残りの仕事はもう興味がありません。江部は経験や勘によって叩き上げた、自分の持てる全技術によって、困難な岩盤や地層を掘り進むことに生きがいを感じる男であり、それが彼の全人生でした。したがって、自分の技術を要しない現場というものは、彼にとって生きがいを感じることができません。今日流に言えばアイデンティティーの問題です。工事は難工事であるため、工事を請け負った親方にとっては契約期間との関係で出費がかさみ、人夫への支払いもままならないところに追い込まれております。殊に江部のような優秀な人夫(職人)に対しては支払わねばならない賃金も高くなります。しかし本人の方からの申し出で他に動きたいということになれば、親方の立場は強くなり、場合によって

は未払いの賃金を棒引きにすることもできるわけです。少し作品の表現を拾ってみましょう。

「先き線を見付けようと思つてな。ここはもう第三導坑は貫通したし、こんな玩具見たいな隧道じゃ、もう俺のする仕事は無えよ」と、江部は答えた。

事実、江部の技倆を待っているものは多かつた。その溪谷の鉄道だけでも、百に余る隧道があると云われていた。それも、支えても支えても押し崩して来る、バラスの埋積見たいな地質のもあれば、粘土質のもあり、そうかと思つと、滅茶に堅くて、ハツパ穴の周りだけが少し壊れて、外の処はコソク（外す）しようにもどうしようにも、手がつけれられない、と云つた風の岩盤もある、と云う風だった。

江部は、それ等のどんな隧道でも、自分がその隧道の内部から生れでもしたように、感で岩質をつき止めるのだった。

そう云う人間を抱える、と云うことは、親方にとっては、金儲けの機械を抱え込むのと同じであつた。

だから、江部は自分から口を探さなくても、隣丁場からも「見るだけ見てくれ」と頼まれたりしているような、塩梅だった。

そして、江部程、欺しい、男はなかつた。彼は五十年の生涯を、たゞ、欺され続けて来た、と云つても言い過ぎはしない。（中略）非常にいゝ条件を彼は、彼を雇い度いと思つ親方に示される。

すると、江部は、そのいゝ条件に惚れ込んでしまう。（中略）

そのいゝ条件の下に、どう云う岩質と闘い、どんな素晴らしい進行能率を示すか、と云うことの空想に耽つてしまふのだった。

さて、来て見ると、彼の空想はメチャクチャな、困苦な現実に曝される。前の所より悪い位だ。ところで、彼は平気であつた。

隧道の掘鑿に、「困難さ」がある間は、飯場に於ける自分の暮

らし向きなどは、考える暇がないのだった。

江部のような職人（技術者）は、天竜川沿いの難工事の現場を抱える親方たちにとっては是非とも必要であり、雇い入れる段階では好条件を提示します。そして難工事区間が終われば早く出てもらつたほうが有り難いわけです。善良な技術者江部は今までの人生で繰り返しこのような裏切りに会いながら、やはり彼は懲りもせず、難工事を求めて移動するわけです。

葉山の作品を見ておきますと、資本家やその手先は憎悪の対象として描かれておりますが、その他の人物は悪人として描いてはおりません。その辺りに葉山作品の甘さがあるとも言えるのですが、『濁流』の江部を見ておきますとソルジェニツインの『イワン・デニソヴィッチの一日』を連想させもいたします。江部の問題は資本主義体制下における労働搾取以外のなものでもないわけであり、搾取機構と戦う陣営からすれば江部の善良さは敵を利用する行為であるかも知れません。しかしまた一方、労働者としての喜びは苦しい労働自体のなかにもあるわけであり、それは一人の人間である労働者にとつてのアイデンティティーであるとも言えます。炭坑労働者からの聞き書きである上野英信『地の底の笑い話』（68・9 岩波新書）にも通じます。

苛酷な搾取現場としての炭坑にあって、苛酷な生活や労働をルポルターージュした上野に対して、上野さんは苦しいということを書いてくれるが、その中にある喜びを書いてくれないと、ある坑夫が言ったということが報告されています。搾取機構のなかで搾取される労働者という構図は当然ですが、巨大な自然との戦いの物語のなかに挿入された一挿話として、江部のような人物をすくいとつてくるところに、葉山文学の一つの魅力があるとも言えましょう。

次の『今日様』（33・10 『改造』）は、一九三二（S7）年、一時

期妻の実家を頼って中津川辺りに住むことになり、葉山は初めて真似事のような農業に従事しながら、山村農民の生活実態に触れ、そのよくな体験から生まれた作品です。

葉山をモデルにした山田が、妻の兄夫婦、藤蔵とおたねのもめ事の仲裁のため、兄嫁の実家に出掛ける場面があります。義兄夫婦はいま山の田にすぎりつく農業をしております。兄嫁たねは女学校を出ているくらいですので、実家はさほど貧しいわけではありませんが、地に貼りつくような農民の生活であることに変わりありません。一方兄藤蔵は商家の出身で、二人は何事によらず考え方にズレを生じます。またおたねとその母もその合わない親子で、顔を合わせると常にいがみあいます。作品はそのような、善良に暮らせば暮らすほど抜け出口のない混沌に陥らざるをえない、山村農民の日常を見つめる山田の思いもまじえて、それまでの葉山作品にはあまり見られなかった、沈んだ語り口で進行します。

「云いがりなんで、ござんすよ。あんた様。藤さんは百姓じゃござんせんでしょう。三十過ぎて百姓を始めたのでござんしょう。おたねは生れながらの百姓でござんす。百姓でもむづかしい山の田でござんしょう。藤さん一人でもどうにも、なるもんじゃござんせん。」

藤さんは、だから、おたねに百姓をして貰わんと困るんでござんす。ところが、それ丈けでもいけんのでござんすよ。商屋のおかみさんのように、月給取りの女房のようにも、おたねにやっ貰いたいのでござんす。

野良から上って来れば、風呂も沸いていようし、御飯の仕度も出来ていようし、お銚子も食卓台の上に欲しい、と云うのでござんすよ。ところが、おたねは藤さんよりも、もっと暗くなるまで野良に働いていて、藤さんが腹がペコペコになって帰っても、お

まんまも炊いて無い、と云うのが不足なんでござんす。それがおたねに出来ないのござんす。

つまり、藤さんが世間が広過ぎるんでござんす。

これはおたねの母が山田に対して、娘の置かれている現状を的確に語り聞かせている部分です。おたね母子は顔さえ合わせば、常に仇敵同志のごとくいがみあいながら、娘の居ないところではしみじみと、娘が置かれている立場の苦しさを語るのです。母として娘に深い理解を抱きながらも、理解したところでどうしてやることもできない遺る瀬なさが伝わってまいります。

作品の発表は一九三三（S8）年。昭和恐慌が進行し、都市も農村も疲弊が深まります。社会不安が深まり、言論弾圧はそれに比例する形で強化されました。そしてこの年、小林多喜二は虐殺されます。自己を民衆の一員として、同胞としての民衆に暖かな眼差しを注ぎ続けた葉山ですが、階級的視点からのプロレタリア解放という観点だけではすくい上げることのできない、山村農民の混沌に直面し、認識の変更に迫られたのでしょう。

俺は、物欲一点張りの親爺や、その長男たちよりも、自分を優れたものと思ってる。そして、その理由は、俺が、人類の理想と云う呪文を知ってる、と云う丈けの理由からだ。そして、その呪文を知ってる俺は、何の通力も持たないで、軽く見ている人間の処へ、恥知らずにも転がり込んでいる。（中略）

が、そうだろうか。俺が優れていて、親爺たちが劣っているのだろうか。考え方が違っている丈けで、人間の値打に高下をつけて、俺は居たんでは無かったか。

俺は、呪文のように決ってしまった、考え方の上に立って、人を単純に片付けていたのじゃなかったか。

そうだ！ 人間としては、誰でも同じだったんだ。これが大切

なことだったんだ。考え方が違うと云うだけで、人間の値打にまでは差異はないんだ。だが、そうだろうか。

と山田につぶやかれます。

山田は葉山をモデルにした人物であり、この部分からもうかがえますように、大きな社会全体の中での人類の幸福について考えた歴史を持っていくわけです。しかし現実には、運動家とは疎遠になり、また運動自体も組織が壊滅している時代です。にもかかわらず、山田は自己内部に抱きこんだ価値観や人間観、そして認識構造を人知れず守っているわけです。あるいは守ってきたつもりです。そのことが山田自身の、山田周辺の人々に対する一種の密かな矜持でもあったのでしよう。しかし現実の山村生活者は、全力を投入しても生きることだけが目的であるような、どうあがいてみても抜け出し得ない混沌に追い込まれています。山田はこれまで物欲に執着する人たちを軽蔑していましたが、最低限の生活防衛として物に執着せざるをえない現状を認識し、「人類の理想」などというカラ念仏を唱えるだけの無力さを深いところで痛感します。そして、社会認識とか世界認識といったところから遠いこれらの人々に、深い共感を抱きます。ある意味では、これは危険な傾向です。認識の基盤を組み替えようとするわけですから、組み替え方によっては人情主義的な人間関係を媒介とする、日本型人身支配を容認することにもなりかねません。

それは解放理論という点から見れば、認識の後退であり、このような山田を共感をこめて描く葉山もまた、最後の「だが、そうだろうか」という留保はあるにしても、ここで変わったといえます。ここで葉山はこれまでの認識を根本から覆すような、かなり危険な瀬戸際に立っているといえます。しかしまた、今までの民衆に向けてきた暖かい眼差しはこれ以後も変わることはありませんが、人間認識に今までは別な深まりを持ったと言えるように思います。

## 五 自然描写・自然観

先に『濁流』の所でも触れたのですが、葉山の作品には、厳しい自然と向き合う人間という構図がよく描かれます。葉山が育ったのは福岡県京都郡という、北九州から少し南に下った辺りで、自然風土の面ではさほど厳しいところではありません。したがって人間が自然と対峙し闘いながら生きていくという存在認識は、生い立った環境の中で形成されたものではなく、後に獲得したものでしょう。考えられることとしては、一種のなまくらな学生生活を投げ出し、初めて労働を経験したのがカルカッタの外国航路の貨物船であったという辺りに起因するのかも知れません。

例えば『海に生くる人々』に、

船を一廊として、人間と機械とが完全に協力して、自然と戦っている時に、船員たちは、自分たちが、船のりであることを、此の時に以上に癪に障り、心細くなり、哀れに気の滅入ることはなかった。そして彼等は、あらゆる瞬間の極度の緊張と、注意にも拘らず、自分の運命を哀れむのであった。

とありますように、葉山の描く自然はおおむね、日本の伝統的な母なる自然ではなく、自然は悪意をもって人間を脅かし、人間は自然と闘って生きております。先にも申しましたように、葉山にとっての初めての労働生活が海上労働でした。『文学的自伝』(36・11『新潮』)の中にも少し回想しておりますが、士族で地元名士である郡長の息子として育った彼は、おそらくその時まで働くという経験を持ったことがなかったのではないのでしょうか。にもかかわらず、見習い水夫として貨物船の甲板作業などもしながら外洋に出たわけです。玄界灘から東シナ海の激浪にもまれたに違いありません。おそらくそのような経験から得た基本認識が、『海に生くる人々』の中にも流れているものと思

われます。

『海に生くる人々』は激しい荒海の水夫の物語ですから、自然と聞かぬ関係というのも素直に納得できます。しかし自然と対峙しているのは、葉山作品のなかでは海上ばかりではありません。土木工事現場に材を得た作品にも、同じ構造が描かれています。

『山谿に生くる人々』(35・1『改造』)の一節を見てみましょう。長い表現ですので、必要部分のみを列挙します。

「山がきます。直ぐ出て下さい」

と大山は、緑屋に飛び込みざま、怒鳴るように云った。

「ハッパですか」(中略)

「滅相もない。ハッパなんかじゃないんです。山が来るんです。早く出て下さい。話は外でします」

と、大山は誘い出すように、表に飛び出して、

「山が来るんです。六十尺位の高さの山が来るんです。報償道路で止まらねば、此家は埋めちまいます。おかみさん、早く出て下さい。そして、こっちへ来て、山を見て、下さい」

と、大山は、山の直ぐ下になっている、奥の間に行つて、マゴく探している、おかみに怒鳴った。

おかみは、何か大切なもの、或は命より大切なものを探そうとでも、するように、暗い奥の間をウロウロしていたが、大山の、これも異常な響を持った言葉に、諦めたのか、見付けることが出来たのか、下駄をつっかけて表に飛び出して来た。(中略)

五秒、十秒、一分、時は極めてゆるやかに経って行った。あゝ、時というものは、ゆっくりする時もあるし、無闇に忙しがる時もあるものだ。(中略)

焦れたいような、粘りつくような時間の前に、殆んど垂直に、山は、その皮を剥ぎ取られた岩盤を、白く、他の一面の緑の中に

浮き立たせて聳えていた。

未だ動かないのだ。(中略)

だが、バラ／＼、バラ／＼と、もう、五時間も前から、「山が来るぞ」と云う警告は、山自身が発しているのだった。

「ウオッ！」

と云う、押し殺したような、呻き声とも、溜息ともつかない声が、見上げている人々の口から一斉に出た。

山が、ゆるぎ出したのだった。

それは山がユラユラとしたのだから、人々の眼がグラグラとしたのだから、その刹那には分からなかった。

が、続いて、鈍い響で大地が呻き声を上げた。それは人々の耳を打ち、足を顫わせた。

山は底鳴りをさせ、地響を立てながら、要領深く、慎重に沈み落ちた。

このように、読者もまた、作中人物とともに固唾を飲みながら見守らせられるような文体です。そして幸い、旅館緑屋を直撃すること無く、地滑りはおさまります。

「バンザーイ！」

と、大山は、小林へ、両手を高く上げて叫んだ。

この部分は葉山の優れた文体例とも言えるのですが、工事場の崖の崩落。崖下の宿屋の真上の崖の大きな地滑りです。なにもものに圧迫されるような人々の緊張、沈黙のうちに計り知れない力を貯め込む山、山の変化、山の力の大きさ、そして無事であったことの安堵。「バンザーイ」とより以外に言葉がないわけです。鉄道工事をすすめる人間たちが寄ってたかって山を、自然を傷めたのに対して、山が、自然が人間に襲いかかってくるわけです。

『濁流』では川が人間の営為の一切を押し流してしまします。

天龍の濁流は、積み上げる土俵と、争うように盛り上がった来て、打っ衝っかって来る。

一町とは距たぬ上流に、Y発電所の半ば打ち上げたダムが、天龍の如き濁流、激流と闘って、恐しい滝をなして落ちている。

それは、噴いているようだった。

ダムの直下の、吊橋は、岩盤に突っ張った足を、増水のため洗われて、踏み外した。(中略)

今度は、流される、今度は折れる、今度は捲げる。

と、橋の袂に立った群集は、雨に濡れるのも忘れて、自然の豪壮な闘争に見入っていた。

労働者たちは、その全力を挙げて、各々の部署を守った。

『濁流』には天竜の峡谷に貼りつくようにして生きる農民と、その峡谷に流れこんだ工事人たちのいざこざ、工事関係者間の軋轢、そして搾取される底辺労働者の姿が描かれておりますが、「濁流」はそれらのすべてを押し流し、猛威をふるった大洪水によって道路が不通となってしまう。峡谷に閉じこめられたすべての人間たちは、「峡谷」に住む、労働者、農民、川舟船頭、仙人。それ等は自分自身を救う為に、一つになって、リレー式に救援隊を組織し、協力し合って局面を切り開こうとします。そして葉山は「自然に対しての、人間の闘争！ それは今一時、自然によって復讐された」と表現します。さらに労働者や農民が協力している作業風景を「人類の光を護る共同作業のように」としめくくりまします。

『海に生くる人々』は海上労働者を描いた作品であり、「山谿に生くる人々」や『濁流』は峡谷の土木工事に従事する労働者を描いた作品で、いずれも剥き出しの自然と厳しく関わりざるをえないため、自然との闘いという様相が生じて当然との見方もできます。しかし葉山にとって農民もまた、自然と闘う人々として描かれます。「村の白

痴の思ひ」(37・7・11、13、14『報知新聞』)でも「農民は先にいったように、自然と絶えず闘っている」と言っております。農業においては海上や土木工事現場のように、自然は目に見える形で襲いかかってくるわけではありませんが、目に見える形でないゆえに、陰湿さを帯びて農民を痛めつけます。そのような意味で農民もまた、自然と闘っているわけです。

このような葉山の自然観を『濁流』の表現を手がかりに整理すれば、それは人間観とも重なるわけですが、人間の営みは自然との闘いであり、自然と闘うことで人間の幸福を維持しようとしているのだという、基本的な認識があったように思えます。そして、自然と直接闘っているのが底辺民衆なのだ。さらに、その底辺民衆の自然との闘争をより厳しく困難にするものこそ、資本性社会であり搾取機構なのだ。

## 六 文 体

先に自然観との関係で『山谿に生くる人々』を紹介しましたが、あの山の崩落の場面の描写も、実に緊張感にあふれておりました。臨場感といってもよいかも知れません。

『海に生くる人々』の冒頭もまた、緊張感のみなざるダイナミックな文体として有名です。

室蘭港が奥深く広く入り込んだ、その太平洋への湾口に、大黒島が栓をしている。雪は、北海道の全土を蔽うて地面から、雲まで厚く、横に降りまくった。

汽船万寿丸は、その腹の中へ三千噸の石炭を詰め込んで、風雪の中を横浜へと進んだ。船は今大黒島をかわろうとしている。その島の彼方には大きな浪が打っている。万寿丸はデッキまで沈んだその船体を、太平洋の怒濤の中へこわごわ覗けて見た。そして、

思い切って、乗り出したのであった。

「大黒島が栓をしている」というのは擬人法ですが、自然の一部分である大黒島が、まるで独立した自身の意志によって、そこに悪意をもって頑張っているような印象があります。また「船は今、大黒島をかろうとしている」という表現も、船が単に大黒島の横を通り過ぎようとしているのではなく、双方が互いに移動して、位置を入れ替えようとしているような印象を与えております。そして次に「万寿丸はデッキまで沈んだその船体を、太平洋の怒濤の中へこわごわ覗けて見た」とあります。ここでも、船員たちが船を操っているのではなく、船が自身の意志によって行動しているかのように見えます。古代の人々は人間を取り巻く一切の事物に靈力(神)を想定し、敬ったり恐れたりしておりました。同様に、葉山が描きだす自然、そして船までもが自らの意志を持っているかのように描かれます。ここに作品の、文体としてのダイナミズムが生まれます。

同じく『海に生くる人々』の冒頭ですが、室蘭港は濃霧に閉ざされておき、大黒島の灯台の明かりがほとんど見えない状況で、灯台は霧信号として空砲を打ち鳴らします。その情景ですが、次のように描かれています。

と、突然、ブリッジに立っている者は船長から、波田に至るまで、急に飛び上がった。怖ろしい速力を持った巨大な軍艦が、その主砲を打っ放して、その轟音と共に、此の哀れな万寿丸の船を目標けて、突進して来たのであった。それは全く咄嗟の場合であった。彼らに乗っている万寿丸の方が島に接近しているにもかかわらず、「怖ろしい速力を持った巨大な軍艦」が「主砲を打っ放して」「万寿丸の船を目標けて、突進して来た」と表現しています。ここにも、自然は人間に悪意をもって対峙しているものという、一種の葉山特有の自然観を読み取ることが出来ます。

またこれも葉山論のなかでは有名な部分で、室蘭出港に際して水夫たちがストライキを打つ場面、他にも類似の場面がありますが、

水夫等が、要求条件を提出して、目下交渉中であるから、彼等は働いていないのだ。それで、船が動かないのだ! と云うことが、船内一般に知られるだろう。我々の要求条件は、エンジンの労働者に依っても、吟味せられるだろう。

のように、今まで船上の水夫の物語を語っていた語り手が、船長達に要求を突き付けていく場面で、「水夫等が」「彼らは」と客観的立場から語り続けることが出来なくなると、作中の水夫たちの闘争の一員として語り手も参加し、「我々の要求条件」と口走ってしまうのです。

この辺りを見ておきますと、一九二一(T10)年一〇月、名古屋新聞社の労働問題担当記者であった葉山が、愛知時計電気株式会社との争議を取材に行ったことが想起されます。葉山は名古屋セメントを敵首され、極貧の生活に陥落しそうになったとき、名古屋新聞主筆小林橋川に救われ記者となりました。が、記者として争議の取材に出掛けておきながら、争議団の応援演説に立ち、ついには争議団に入ってしまう。対象を对象として冷静に客観的に眺めていられない性向の葉山は、立場を無視して対象のなかに飛び込んでしまうわけです。語り手の作中への参入などは、しばしば指摘してまいりました作家としての素人性であり、場合によっては作品としてどうにもならないこととなりますが、一方では、作家として、語り手としての迫真性として、作品の訴求力を高めることにもなるわけです。

このような激情の吐露や緊張した文体による描写の場面に、肉体に対する危険とは、火事が中風の婆さんに、石臼を屋外まで抱え出させたほどの目覚ましい、超人的な活動を、水夫達に与えた

というように、突如ユーモラスな比喩が挿入されたりいたします。

これは激浪と闘う水夫の労働場面のなかに挿入された表現ですが、緊張感を高めたかと思うとユーモラスな表現によって緊張を緩和したりと、読者の心を自在に操りながら語り進めます。そしてこのユーモラスな表現というものは、とりすましたユーモアではなく、読者の日常性に根ざした庶民性にあふれてもいるわけです。

葉山は常に民衆の一員として民衆を愛する作家だったと申しましたが、それはお高く止まっていることへの嫌悪でもありまして、お高く止まっているものへの嫌悪は作品のテーマともなります。晩年、妻の実家を頼って中津川に移った後の作品ですが、「山の幸」(38・11『日本評論』)には次のような表現があります。

村の道から一段低いところに、この村役場は建っていた。(中略)この役場を見、その役場に入っって見て、花田はこの村に永住したい気持ちになった。

——何と云う謙虚な役場だろう。威圧するようなところが些かもなく、事務室とも思えない、たゞの広間へ、吏員が目白押しに並んで、どん／＼事務を片付けてくれる。この村にこの役場がある間は、この村は必ず栄える——と、花田は直感したのであった。

この前任んでいた村は、大きな村であったが、その役場にある雰囲気は、官僚的なものであった。(中略)

だが、この村の役場は、役場自体がこう云っているようだった。「いや、汚いのはお互様で、へへへ」と。(中略)

先の村は云わば、他所行きの時の旦那衆のような姿だった。今の村は、肥料を担いだ時の百姓の姿だった。

「山の幸」が書かれた時代はもう日中の全面戦争の時期であり、蘆溝橋事件を引き金に突入した日中戦争が雪達磨的に拡大し、昭和恐慌

以来疲弊を深めた国民生活の中で、さらに戦争遂行のための国力総動員が国民に求められ、働き手は徴兵によって戦地に奪われながら、物資の供出が強いられておりました。そのような戦時下状況の中で役人たちは農民に苛酷な要求を強いてきます。末端の役場の吏員たちは国家の要請に従っているにすぎないということではありますが、ここではその態度を問題にしているわけです。官民の分離ということを葉山は日記で嘆いたりしており、役場の吏員たちに最低限、村民の立場に立った姿勢を求めているわけです。

このころはもう階級意識というような漢字で表現できるような発想は、作品から姿を消しております。しかしなお、民衆という視点、土に這いつくばっている者の視点から考えようとしていることは同じだといえます。

## 七 視座、発想、方法

都市労働者を描いた作品以外、葉山文学のなかの底辺民衆は自然と聞かれています。都市労働者の場合、多くは工場であり自然との闘いの姿は当然出てきません。では、都市の底辺民衆を描く場合とそれ以外とは、葉山の視座や発想、人間認識に区別があったのでしょうか。

有名な「セメント樽の中の手紙」や先に見た『誰が殺したか?』などは都市労働者ということになるわけですが、労働の背後に生命的危機が潜んでいることを描いております。両作品はともに名古屋セメント時代の村井庄吉火傷事件がモチーフになっているようですので、共通して当然ではあります。葉山にはなにか原始的な感性があったのではないかと思わせるものがあります。このことについては早く、森山重雄という先生が葉山の感性の前近代性を指摘しておられます(『葉山嘉樹』65・3『人文学報』)。

例えば、古代あるいは原始社会の人々は、生活周辺に常に人間に対する認識できない悪意のようなものを感じていたのではないだろうか。一瞬にして人間から生命を奪っていくモノの存在、幸福から一瞬にして不幸に突き落とす力の存在、あるいはなれ親しんでいる日常性に変化を与える存在、そのような不可解な力の存在を想定して、それを古代の人々は霊的なものとしてとらえていたのではないだろうか。葉山もこれに似て、人間にとって大切なものを奪っていく不可解な力が存在し、その力と闘いながら生きているのが人間なのだという存在感のようなものを持っていたような気がします。それは合理的に説明しようとするれば現代の科学的認識で説明出来ることではあっても、深い感性の底に、そのような不可解な存在、あるいは力への畏怖を抱え込んでいたように思えます。そしてこの不可解な力との人間の闘いを、より困難なところに追い込んでいる者や制度を葉山は憎悪していただのではないかと思えます。

戦争の進行につれ言論弾圧が厳しくなり、直截的な発言はますます困難になります。また、運動組織も壊滅し山村に孤立した葉山は、自己が信じるころにしたがって書き続けます。かつて労働運動の中で結果的に家族離散と愛児の死を経験しております。そのこともあって合法性の限界ぎりぎりのところから執筆します。一九三五年前後の葉山の自覚的な方法意識を「つゆ空の文学を語る」(31・7・6)9『報知新聞』や「民意」(35・6・18)12『東京日日新聞』から拾ってみましょう。

世にはプロレタリア文学が流行れば、直ちにプロレタリア文学に転向し、それが下火になればまた舵を向け直す、といった風な作家があるが、(中略)プロレタリア的なものを書くから、それでプロレタリア作家であり、プロレタリア作家であれば正しい、という風に簡単に片づける者が、ありはしないだろうか。

私たちが何だか食い足りないと思うのは、そういうプロレタリア作家の作品である。

なる程、そこに描かれた事柄は、労働争議があり、××△△△の地下運動があり、牢獄があり、犠牲があり、恋愛さえもある。だが、その作品を流れている感情は、傲慢な高等学校教師風であったり、待合で取引する株屋の番頭風であったりする。そういう風な作品は、私を反発させる。

(つゆ空の文学を語る)

「素肌生活を着てる」

といった風な人々の、民意の綜合像が知りたいたのである。どうもうまく表現出来ないが、赤ん坊の泣き声見たいな「民意」が聞きたいのである。

それは絶対に「民意」で無ければならない。決して「官製民意」や、「軍製民意」や、等々であっては、具合が悪い。そんな風なもの、仰々しくマイクロフォンの前で、喚き立てるものだから、真実の「民意」は、内気なもんだから引っ込んでしまうのだ。

だが、この真実の意味の「民意」という奴は、防声具を嵌められたような変な声を出すかも知れない。多分そうなるだろうと思われる。これからは益々ひどく。(民意)

このような立場から窒息状態にある民衆の「民意」を表現する方法として、いわば「ハンテン文学」とでもいうべきものを提唱します。それは塚利彦の告別式(33・1・27)での「弔辞」で述べた、

氏が、日本に於ける、階級的最初のユーモリストであったように、私たちは、此、困難な反動期に、ユーモアとアレゴリーと、パロドックスを以て、支配階級に抗争する事をも氏の霊前に契います。

に通じるもので、「遺言文学」(31・10・23)と25『東京朝日新聞』)という随筆ですが、

私は、困難期に於ける、「明日」について考える事が、現在、切端詰った必要であると考える。

それは、我々の動物的な生活が、もっと困難になり、人間的な思索がもっと深度化される明日に於いては、文章がハンテンを裏返しに着たようにで無くては、発表され得ないだろう、と云う見透しである。

ハンテンの表には、帝国主義戦争絶対反対と、染め抜いてはあ  
るが、そいつを裏返しに着た場合には、牡丹の花模様か何かで、百人一首もどきに、文字が染め散らしてある。

と言います。帝国主義戦争絶対反対などというテーマを、直截に表現できる時代ではありません。執筆に際してテーマを隠蔽しつつ、表面的にはなんでもないことを書き、読む人の眼力によって裏の文字が透けて見えてくるような作品を書こうということを、裏返しのハンテンによって比喩的に言っております。いささか駄洒落的な解釈ですが、ハンテンは反転にも通じます。

戦時下においては報国文学や国策文学といった、政府や軍部の方針に無批判に迎合した作品が多く書かれます。おそらくそのような作品を書いていけば生活は安定し、周囲の村人からの白眼視も回避できたに違いありません。家族が、特に愛する子供たちが、あの作家の家族ということで差別されていることは堪え難いことであったに違いありません。が、葉山は時代に妥協することをしません。

『葉山嘉樹日記』を見ておりますと、その辺りの苦しさ書かれておりますが、同時に葉山という人は骨の髄から時代に迎合できない人であることもうかがえます。

上海では盛んに暴れまくり、満州では滅茶をやっている。そし

て内地では、失業者、東北饑民、ルンペン、労働者皆飢えている。その時代的苦悩は同時に自分自身の苦悩である。いい加減な与太っぱち小説なんか書けるものか。子供たちは、兎まれば健やかに成長していく。(32・2・5)

インチキ時代、インチキ時代、インチキならざるもの存在の如何に困難な時代であろう。上海、満蒙、何と云う暴挙であり、何と云う国民であろう。こんな世の中に生きているのは恥辱だ。そして反戦を叫ぶ機会も、発表する紙面も無いとは!

一切の民衆の生活は泥土に委せられている。ああ汝、呪うべき黄金魔よ! そして、人間にあらざる為政者流共よ!

(32・2・19)

葉山はたった一人の密室としての日記のなかに、戦争が民衆の生活を窮乏に追い込んでいく元凶であり、戦争は「黄金魔」と結びついた「為政者」たちの恣意によっていることを記しています。

見晴公園の文学碑には「馬鹿にはされるが真実を語るものももっと多くなる」と刻まれています。時勢の中で価値観や制度は都合の良ように改変され、「真実」を言い続けることは、気恥ずかしかったり周囲に白けられたり、時には命懸けであったりして、なかなか難しいものです。葉山は子供への愛情の表現についても気恥ずかしいほどに率直でありました。人々は世間体や世間との妥協によって心の真実にブレーキを掛けたりします。時代的な制約のため十分に開花しているとはいきませんが、可能な範囲の中で葉山という人は、心を自由に開き、高らかに人間への愛を叫びたいと願っていた人であり、それが葉山文学の魅力の源泉ではないかと思えます。

本稿は一九九七年一月十八日、中津川市で開催された「葉山

嘉樹短編小説選集』刊行委員会主催、葉山嘉樹没後五二周年記念「文化講演会」での講演内容に斧鉞を加えたものである。

なお、文中引用の作品は『葉山嘉樹全集』(75、76 筑摩書房)に依っているが、表記は新字・現代表記に改めた。

---

“An appeal of Hayama’s literary works”

Takashi ASADA

This essay consists of the record of a lecture meeting on Hayama Yoshiki's literary works, which was held in Nakatsugawa City in Gifu prefecture on October 18th 1997 to commemorate the anniversary of his death.

Yamaguchi Village in Nagano prefecture is located next to Nakatsugawa, where Hayama lived his last years. Not a few locals were acquainted with the late Hayama while he was alive, and a monument to the memory of Yoshiki Hayama was raised in the village by those who were moved and influenced by him and his works. Nowadays this memorial have come to represent a spirit of the local reformists. Last year, a book entitled “Selections from Yoshiki Hayama’s short stories” was published by those who were concerned with the monument. This lecture meeting was also organized by the locals.

In the lecture, I lectured on an appeal of Hayama’s literary works from five point of view, that is; Hayama's description of children, that of the human being, that of nature (his idea towards nature), style and his way of thinking.

Hayama describes children vividly and lovingly in his works. However their parents are workers who were always in danger of their lives because of dangerous works they have to engage in, so the children who look happy apparently also live with invisible anxiety in the future. The workers are poor and always in danger. Moreover systematic exploitation of this society is there as if to reinforce the danger of their life. If the parents were made victims of the exploiting structure, their children who once looked happy would instantly fall into a miserable life.

“Hayama literature” appeals humanity to the readers sensuously without resort to theories.

